

ザ・2020 ビジョン「第4期 コモンズ POINT（ポイント）応援先  
（特）日本視覚障害者柔道連盟からの報告（遠藤義安専務理事）

皆さまの温かいご支援をいただいて臨んだリオ・パラリンピックでは多くのドラマを生み、帰国後には連日のように代表選手がマスコミ等に取り上げられ、また講演依頼も多数に上り、選手たちの休日返上での講演活動などによって視覚障害者柔道の普及・理解にも大きな役割を果たせたものと思っております。そのような中、早くも2年半後に東京パラリンピックが迫ってきております。国民的一大行事である東京オリンピック・パラリンピックに向け、皆さまの後押しをいただきながら当連盟一丸となり、多くのメダル獲得を目指して活動を続けております。

昨年4月から新たな体制にて選手強化への取り組みを始め、ウズベキスタン・タシュケントにて10月に開催された2017 IBSAワールドカップウズベキスタン大会へ選手18名（男子13名、女子5名）を派遣し、銅メダル3個を獲得しております。男子-81kg 北園新光、女子-48kg 半谷静香、女子-63kg 小川和沙の3選手が銅メダルを獲得、3位決定戦で3名の選手が惜しくも敗退となっております。リオ・パラリンピック後、新体制になって最初の国際大会でしたが、各国共に新たな選手を育てて臨んでいる中での戦いで、予想以上の苦戦を強いられるものでした。

また、11月26日（日）に講道館にて開催した第32回全日本視覚障害者柔道大会は、外国選手25名を招いての総勢75名を数える選手の参加となり、国際色豊かな大会となりました。外国選手の活躍には目覚ましいものがあり、日本選手の頑張りを期待して会場を埋め尽くした多くの観戦者には、東京パラリンピックは大丈夫なのかとの心配を抱かせてしまうような日本選手の優勝階級が少ない結果となってしまいました。

このように不安材料がないわけではありませんが、新たな若手有望選手の発掘に加えて新人選手の代表入りもあり、しっかりと建て直しを図って東京パラリンピックに向けたかと思っております。



国内での東京大会への機運も高まり、選手村などの計画、開会式が行われる国立競技場の形が徐々に見え始め、柔道競技の会場となる日本武道館の改修工事の内容も具体化してきています。開催国であることで、益々東京パラリンピックへ向けての責任の重さを痛感しているところでもあります。「礼に始まり礼に終わる」人間教育としての柔道を、障がい者スポーツを通して、多くの皆さま、特に日本の将来を担う若者、子供たちに夢と希望と感動を与えられるよう努力する所存であります。

引き続きの応援の程、どうぞよろしくお願いいたします。



\* コモンズ投信株式会社 8周年イベント(2017年3月10日開催)に遠藤監督、若手選手、事務局スタッフの方に登壇いただき、ファンド受益者のみなさまと交流を深めていただきました。当日はこども受益者向けセミナー「見るを知る」も開催しました。

当日の遠藤専務理事のスピーチはこちらからご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=TWBYjI8PI2s&feature=youtu.be>

